表5　メンタルヘルス（学年階級別）

学年階級 人数（名） / メンタルヘルス K6分類	高校生 24		予備校生・浪人生 3		大学生(高専・短大・院生含む) 61		社会人 111		無職・その他 27		無回答 1		合計 227	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
陰性群(0-4点)	5	20.8%	1	33.3%	27	44.3%	51	45.9%	12	44.4%			96	42.3%
陽性群(5-12点)	14	58.3%	1	33.3%	28	45.9%	45	40.5%	7	25.9%			95	41.9%
重症群(13点以上)	5	20.8%	1	33.3%	6	9.8%	15	13.5%	8	29.6%			35	15.4%
無回答											1	100.0%	1	0.4%

表6　メンタルヘルス（本アンケート回答回数別）

回答回数 人数（名） / メンタルヘルス K6分類	初めて 227		2回目～9回目 273		10回目以上 151		無回答 4		合計 655	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
陰性群(0-4点)	96	42.3%	116	42.5%	73	48.3%	3	75.0%	288	44.0%
陽性群(5-12点)	95	41.9%	105	38.5%	29	19.2%	1	25.0%	230	35.1%
重症群(13点以上)	35	15.4%	51	18.7%	49	32.5%	0	0.0%	135	20.6%

18 地域包括型HIV陽性者と薬物使用からの回復支援モデルの開発・実践
-HIV・薬物をテーマにBlending Communitiesをつくるしかけ-

研究代表者：白阪　琢磨（国立大阪医療センター　HIV/AIDS先端医療開発センター）
研究協力者：榎本てる子（関西学院大学　神学部）
野村　裕美（同志社大学　社会学部）
松浦　千恵（安東医院PSW・バザールカフェプロジェクト コーディネータースタッフ）
狭間明日実（同志社大学　バザールカフェプロジェクト インターン）
柳沢マリオ（バザールカフェプロジェクト　店長）
げいまきまき（SWASH）
伊達　直弘（非営利活動団体　チャーム　ひよっこクラブ）
さ　と　る（京都ダルク）
まあちゃん（LIVE Positive Women's network）

研究要旨

エイズ動向委員会が発表した日本におけるHIV感染者/AIDS患者の累計数（平成26年9月28日現在）はHIV陽性者16,593名とAIDS患者7,516名、合計24,109名（血液凝固剤による感染を除く）である。[i]

医学が進歩した今日、慢性疾患に位置づけられているHIV感染症の新たな課題は、「地域で暮らす長期療養型HIV陽性者の支援」である。HIV陽性者の病院受診は、平均3ヶ月に1回となってきている中で、HIV陽性者の高齢化の問題、また近年ではHIV陽性者における薬物使用の問題が明確になってきている。これらの課題に関して、一部の医療関係者や支援者の間で意識されてきたが、具体的な対策や支援が行なわれてきた実績はほとんどない。このような状況の中で、長期療養型・地域型の支援プログラムにおいてどのような支援体勢が可能なのか、当事者が望んでいる支援体勢について調査し、プログラムを開発していくことが性急に求められている。

本研究では、地域において薬物依存症または精神疾患を持ったHIV陽性者の支援体勢を構築するため、啓発・調査・支援の3つのアプローチを行なった。

啓発としては、HIV をキーワードに、外国人、セクシュアリティー、セックスワーク、薬物依存症、統合失調症など様々な課題について、地域で働く精神保健福祉士、宗教者、学生、医療従事者などを対象にケアカフェを行なった。ケアカフェとは、多職種による顔のみえる関係づくりと気軽な相談の場を地域に定例的に創出することを目指し、北海道の旭川医科大学緩和ケア科の医師・阿部泰之氏らが地域の仲間に声をかけて始めたものである。理論的基盤として、多職種の連携がうまくいかない現象が起こるのは、チーム医療や多職種連携はできて当たり前、という思い込み、あるいは、自分にとっての常識が他人にとっても常識であるという思い込みがあるためであり、それを解いて実践につなげるという構造構成理論を基礎とする信念対立解明アプローチが主としてあるものである。対面の対話を通し、人はそれぞれ違うということに気付き（相対的可能性）、その違いを認めた上で協力していかなければならない（連携可能性）という思考を対立場面で活用していくアプローチを基盤に、主体的で自主的な発言を尊重する成人教育理論、情報は強い紐帯よりも弱い紐帯を通じて受け渡されたほうが、より多くの人々に到達し、より大きな社会的距離を乗り越えられると考える弱い紐帯の強さの理論、運営は参加者による助け合いによって行われることを前提とする相互扶助、ワールド・カフェという対話手法など、4つの理論を支えに、地域において実践されている。

本研究における啓発においては、①これまでのバザールカフェの歴史と経験を生かし、多様な職種の人々、多様な立場の人々が気軽に立ち寄れる場を活用し、②ここならではのトークテーマを提供し、日頃なかなかじ

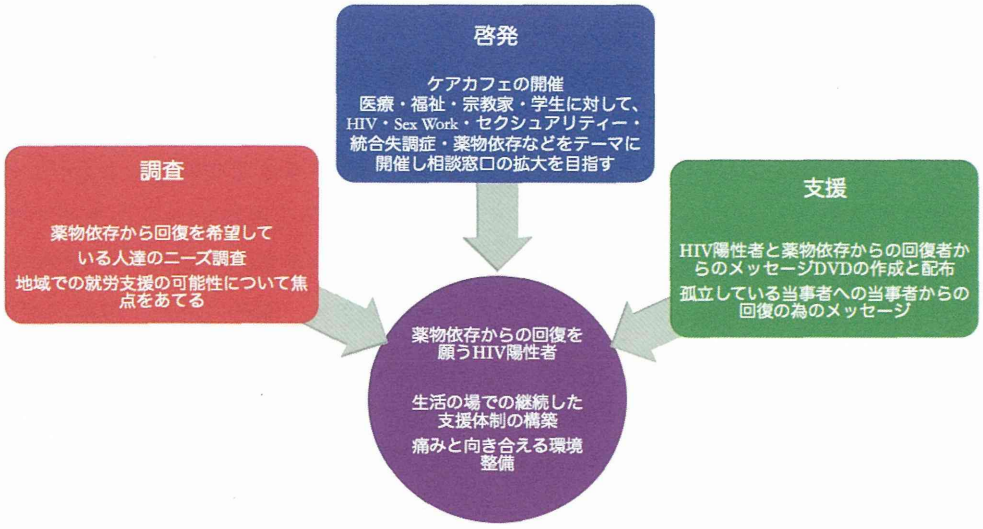
っくり考えることのない「見ようとしないと見えない課題」に多様な参加者が共に目を向ける機会を提供し、③対話交流を深める経験の中から、自らの専門性・立場性への誇りを高め、地域を支える仲間との協働・協力・支え合いの動機が萌芽することを目指すこととした。特に試験的に精神保健福祉士養成課程における科目との連携を行い、対人専門職者としての成長さなかにある学生の積極的参加、ならびに各種専門職団体への参加の働きかけを行い、さまざまなキャリア層の人々の交流をしかけることとした。

今年度は5回実施し、授業との連動、身近な知り合いへの声かけ、SNSでの広報により、実人数77名が参加した。精神保健福祉士養成課程のある同志社大学学生・院生をはじめ、他大学の学生・院生、社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士、ケアマネジャー、看護師、医師、薬剤師、臨床検査技師、産業カウンセラー、福祉施設事務員、公務員、講師などの参加があった。なお、ケアカフェばざーるの特徴は、当事者の参加が多いことにある。参加者の感想によれば、当初予想していた多職種との交流が主たる成果であるだけでなく、位置づけや設定が自然な形で当事者と一緒にプログラムに参加し、対話という化学反応のプロセスをともに味わいながら、専門職がいかにその課題の本質をとらえて話し合えるのか、参加者同士で配慮しあいながらも普段はなかなかできない一歩進んだ話ができることに参加の意義を感じる参加者が多く、その体験が専門職としての自分の枠が広がるような実感を抱いていることがわかった。

調査としては、2007年から京都のバザールカフェで始まった京都ダルクとの共同プログラムである就労支援について利用者がどのような思いを持っているのかを評価し、今後のバザールカフェにおける就労支援のあり方を考える為のパイロット調査を行った。京都ダルクの利用者を雇用という形で就労支援を開始したのは2007年夏からであるが、京都ダルクが開設された2003年の翌年からバザールカフェの庭のボランティアとして京都ダルクの利用者に来てもらったのが共同プログラムの始まりである。今回はパイロット調査として3人の利用者に対し個別のインタビューを行った。結果としては一般就労に進む前段階としてバザールカフェでの雇用経験は確かなステップになるということが明らかになった。また同じ薬物依存症の仲間以外の人たち（バザールカフェのメンバー）とコミュニケーションをとることも「小さな社会」の中での受容体験となり、利用者の自己肯定感が上がったことが確認できた。この意味でも、地域での薬物依存症・HIVについての理解を深める啓発活動は重要である。

支援として、2014年度関西学院大学において特別研究期間中に作成した「生きるために必要だった」-HIV陽性者と薬物依存からの回復のプロセス　薬物依存症からの回復を望む人達からのメッセージ-と題したDVDのコピーを追加し、より多くの心理職あるいは当事者の人達にメッセージが届くように心理職の研修、学会などで配布した。

次年度の課題としては、地域の様々なリソースで働く人達がHIV陽性者の抱える課題や悩みを理解し、地域で支援していく体制を構築する阻害要因を分析し、阻害要因を軽減していくために必要なテーマ設定でケアカフェを継続していく必要がある。また、薬物依存症からの回復の道を歩んでいる人達にとっての就労支援のあり方について内外の実践例を参考にモデルを構築していくのも課題である。支援体勢としては、HIV陽性者・薬物依存という課題を抱えた人達が集まりピアサポートミーティングを開催できる場づくりも性急の課題である。またDVDをより多くのAIDS拠点病院の医療従事者に配布し、当事者からのメッセージを聴く事により当事者理解を深め、回復に必要な地域資源と連携して支援体勢を構築していく事が課題である。医療機関と地域資源が連携し、困難な課題を抱えているHIV陽性者の日常を支援していくことを目指したい。



研究目的

これまでエイズ動向委員会に報告されている感染経路のうち「静脈注射」の使用によるHIV感染は、男女合わせて0.3%と極めて低いが[ii]、地域でHIV陽性者の支援活動を行っている関係者の間では、HIV陽性者が非合法の薬物使用を理由に逮捕される事例や薬物使用による体調不良、治療から脱落する例などが増加しているという実感が共有されている。

国立病院機構大阪医療センター感染症内科を受診した患者の71%に非合法薬物の使用経験が認められたという報告もされている。[iii] [iv]

薬物依存症から回復を望んでいるHIV陽性者との出会いは、HIV陽性者支援を行ってきた関係者にあらたなチャレンジを突きつけている。

米国の調査では、MSM(おもに男性同性愛者)でかつ薬物使用経験者のうち、薬物依存回復施設での治療率はわずか10%であった[v]。回復プログラムに参加した場合も自己のセクシュアリティ(性的指向)を隠す傾向が認められるという。性的マイノリティへの偏見は、当該集団の治療やケアへのアクセスを阻害する要因となる。逆に、性的マイノリティ・コミュニティ内に存在する薬物使用へのタブー意識が、適切な支援システムへのアクセスを阻害する要因につながる。同時に性的マイノリティ・コミュニティー内に存在するHIVに関するタブー意識も当該集団が「接近困難層」になる要因となることが指摘されている。

長年HIVカウンセリングに従事している荻窪病院の小島賢一氏は、日本でHIVが注目されはじめた初期の時期に、血液製剤で感染した人が次々と亡くなっていく時代、差別・偏見は今以上に厳しく、有効な治療法もなく、その重圧に耐えられず、アルコールへの依存を高めた感染者は少なくなかったと述べている。また断酒に成功する度に仲間の葬儀で再発させていた感染者もいたにもかかわらず、当時、アルコール依存は、個人的な問題と考えられ、心理職間やNPO内では検討されたものの、広く取り上げられる事はなかったとも述べている[vi]。

HIV初期時代に、血液製剤で感染した人の間でアルコール依存の問題があったにもかかわらず、痛みをとるための処方箋として使っていたアルコールを個人の問題として考え、その人達の行動の背景にある痛みを見ようとしてこなかった歴史を繰り返さない為にも、今、薬物依存症からの回復を望んでいる人達に必要な体制をつくっていかねばならない。

現在、薬物依存症からの回復を望むHIV陽性者にとって、AIDS拠点病院のみでの対応では十分な対応とは言えない。個人が生活する場において継続して支援を受ける事ができる場が必要である。しかしながら、地域の精神福祉に関わる者がHIV陽性者と出会う機会も少なく、HIV陽性者の背景にある様々な心理的課題に関して十分理解出来ているとは言えない。本研究においては、地域の精神福祉を含む地域資源で働く福祉職、また宗教者、学生などを対象に、まずHIV陽性者の抱える様々な課題に対して理解を深め地域で働く人達が顔と顔でつながりお互い相談出来る関係性を構築する事により、地域におけるHIV陽性者の方々がより安心して過ごせる環境をつくることを第1の目的とする。

第2の目的としては、薬物依存症からの回復を望

むHIV陽性者が社会復帰していく為の中間施設として地域資源を利用し、特に就労復帰までの中間的支援のあり方を模索することである。働くタイミングなど、受け入れ先が必要な知識などを学習し、支援体勢を構築する事を目指す。

第3の目的としては、薬物依存症からの回復を望む当事者が自分たちのメッセージを他のメッセージを必要としている人達に届けたいという思いで作成したDVDを当事者との窓口となっているAIDS拠点病院の医療従事者に配布することで、孤立化を防ぐことを目的とする。

以上、啓発・調査・支援という包括した研究により、薬物依存症を始め精神疾患の課題を抱えるHIV陽性者の地域における支援体勢の構築を目指す。

研究①　啓発　　ケアカフェばざーる

研究者　野村裕美

目的

保健医療福祉に関わる専門職、教育・宗教者、生活主体者である当事者、社会福祉学を学ぶ現役学生等が、地域拠点(バザール・カフェ)にて定例的に対話をする交流を継続的に持つ事で、地域で暮らすさまざまな立場の人達への理解を深め支援体制を構築する為のネットワーク作りを目指す。特に、本研究においては、HIV/エイズが包含する「目に見える課題」(身体的・心理的・精神的課題)と「見ようとしないと見えない課題」(社会的課題・スピリチュアル課題)に対話のテーマを向け、特に「見ようとしないと見えない課題」について対話交流を深める経験の中から、自らの専門性への誇りを高め、地域を支える仲間との協働・協力・支え合いの動機が萌芽することを目指す。

方法

定例的な対話と学び合いの場の開催として、北海道旭川発の多職種連携を育む仕掛けとして全国に広まる「ケア・カフェ」を採用し、同志社大学社会学部社会福祉学科の精神保健福祉士養成課程の課外授業プログラムとして位置づける。活動拠点はバザールカフェとし、そこを拠点にすでに活動している当事者団体とも連携することとした。

①　ケアカフェとは

昨今、地域における医療、介護、福祉の役割は重要性を増している。連携がますます求められるが、領域間にはさまざまな要因によるバリアがある。このバリアがある現状をのりこえるため、北海道旭川・旭川医科大学の医師らにて2012年からケアカフェが開発され、開始された。現在29都道府県、70箇所に拡大している。

ケアカフェの目的は、ケアにかかわる人が顔の見える関係をつくり、日常のケアについて相談する場をもうけ、それによってバリアをなくし、地域ケアの向上を目指すことにある。

②　ケアカフェのコンセプト[vii]

コンセプトとしては、医療や介護、福祉職以外にも広くケアに関わる人々が集まることを期待している。名称は、カフェにちなみ、地域コミュニティをブレンドするという願いを込めて「Blending Community」をスローガンに揚げられているという。対話の方法には、ワールド・カフェの手法を継承し、参加者の発想や気づきを引き出す工夫を凝らす。

運営はあくまでやりたいと思ったその自主性を大切にするものであり、実行委員会を組織し、参加者と実行委員会双方のメンバーを増やしていくことで開催拡大をはかる。

広報には、SNS（ホームページ、facebook）を活用し、参加促進を積極的に発信している。

③　ケアカフェの開催方法

実行委員会を結成し、開催のペースは毎月一回(第3木曜日）とした。事前に実行委員会メンバーにより開催日、開催場所、トークテーマ等を決め、SNS等で広報を実施した。井戸端会議的な持ち寄りの精神を大切に開催運営をするため、当日の会場設営や片付け、おやつの持参など、積極的に参加者に協力を募った。

当日は、1グループに4～5人が着席し、各テーブル1人テーブルホストを決める。模造紙に自由に気づきや意見などを書き込みながら、3回のチャットによる対話を行う形式ですすめていく。

冒頭に自己紹介の時間を十分に設けることができないため、終了後、名刺交換や交流の時間を設け交流をさらに深めてもらった。

④ ケアカフェの実効性[viii]

2014 年の阿部らの医療介護福祉従事者間の連携調査が全国で先進的にケアカフェを開催している 10 地域において、参加者に対して実施された。10 地域は、函館、弘前、八戸、銚子、輪島、名古屋、広島、出雲、福岡、沖縄である。ケアカフェの開催バリアと考えられていた開催ノウハウの提供、開催に係る費用や物品の提供により、開催のハードルが下がり、全国へ展開する契機となっていることがわかった。また、開催支援が初期のみであっても、ケアカフェがそれぞれの地域に根付き、支援終了後も開催が継続されている例が多いことが明らかとなった。

この調査により、参加により、地域の他の職種の役割がだいたいわかるようになり、それらの名前や顔、考え方がわかるようになっていること、また、地域の多職種で話し合える機会や、その雰囲気を与えられたと感じるようになり、相談できるネットワークを得ていることがわかった。

⑤ ケアカフェの限界(同調査)

一方、本調査により、ケアカフェにより他の施設関係者と気軽にやりとりができるようになったり、地域のリソースが具体的にわかるようになったりはしていないことも認められた。これはつまり、ケアカフェの目的が、地域における個人同士の顔の見えるゆるい関係の構築であるため、ここがケアカフェの持つ限界であることも認められた。

⑥ バザールカフェにおけるケアカフェのオリジナルコンセプト

以上のとおり、ケアカフェの実効性と限界性をふまえ、京都では初のケアカフェを企画し行った。持続定例的にケアカフェを開催する場所としては、地域の拠点であるバザールカフェを実施の場と選んだ。ここは滞日外国人等、就労の機会を得にくい社会的マイノリティといわれる人々に雇用の提供を行っている場所である。さまざまな人々の多様性を受けとめ社会につなげる支援を積み上げてきたバザールカフェの実績や資源を活用することを目指した。特に、「HIV・エイズ」の関連問題についての実践的・社会的な理解を広げることを切り口に、地域ケアにおけるネットワーク構築を目指すこととした。参加対象者にHIVに関連する課題の理解を促し、偏見を克服し、支援体制の構築を目指す。

HIV/エイズが包含する課題からとりあげるテーマは、「外国人」「Sexuality」、「セックスワーク」、「薬物依存症」、「統合失調症と女性」とし、毎回3セッションのワールド・カフェ方式の対話を行うが、プログラムの最初にはテーマに合わせて選出された当事者がインスピレーション・トークを行なうことを実施している。

参加対象は、医療介護福祉の狭義の専門職に限定せず、多様な人々の参加を促し、交流する場とした。それにより、当事者、専門職養成課程の学生の参加を可能とした。

実行委員会は、神学研究者、社会福祉学研究者、精神保健福祉士(バザールカフェコーディネーター)の三者で結成した。限界性をふまえた工夫として、①インスピレーショントークの定例化、②テーマに関連する専門知識、社会資源等のミニ講義の実施や資料配布、③ワールド・カフェ方式における3回のチャットにおいては、それぞれにさらにテーマを実行委員会で付与し、対話を構造的に組み立てることとした。

以上のような構造化により、プログラム内での自己紹介の時間を十分に設けることができないため、終了後、名刺交換や交流の時間を設け交流をさらに深めてもらった。

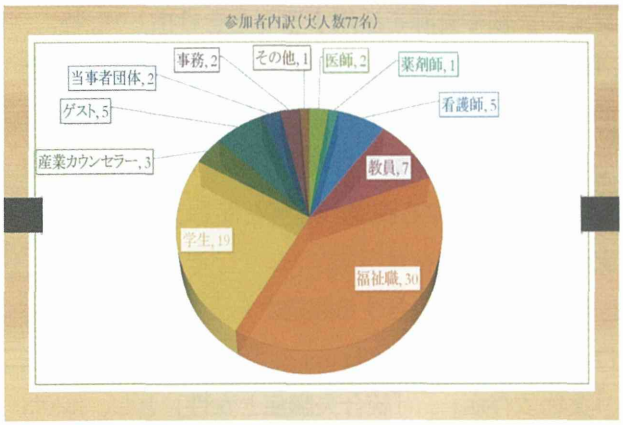
結果

① 参加実績(開催実績)

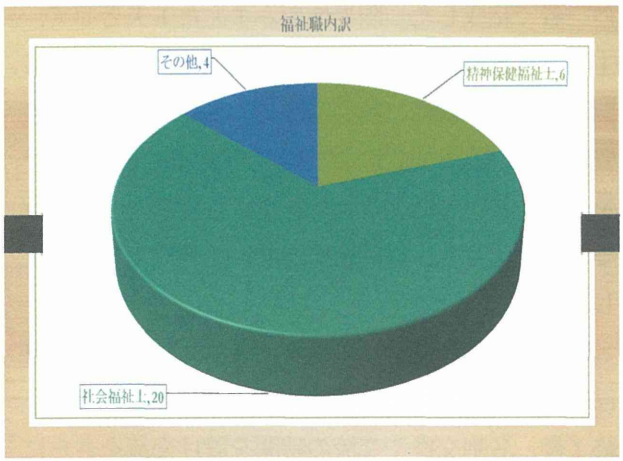
開催実績

	日付	テーマ	人数
プレ開催	2014年10月5日 13時15分～15時30分	ケアカフェはざーるで何が話したい？	15名
1回目	2014年10月16日 18時30分～21時	見知らぬ土地で暮らす	38人
2回目	2014年11月27日 19時～21時	セクシュアリティ	32人
3回目	2014年12月18日 19時～21時	セックスワーク	22人
4回目	2015年1月22日 19時～21時	薬物依存性	33人
5回目	201年1月31日 15時～16時30分	女性 統合失調症	20人

② 参加者内訳（実人数77人）



人数は少ないが、医師、看護師、薬剤師、産業カウンセラー等の参加があった。学生・院生は19名の参加があった。福祉職は実人数30名の参加があった。内訳は以下の通りである。社会福祉士は、地域包括支援センター、社会福祉協議会、医療機関、公務員福祉職、児童養護施設、障がい者自立支援施設等である。その他の福祉職とは、介護保険事業所などのケアマネジャー、介護職、指導員等のことである。



③ 参加者アンケートの実施

ケアカフェ参加後、無記名質問紙を用いたアンケートを実施した。項目は、「仕事、職種について教えてください」「ケアカフェに参加してどうでしたか」「本日のテーマはどうでしたか」「ケアカフェへの参加はどのようにお仕事に役立ちそうですか。その他自由なご意見ご感想をおきかせください」というものである。なおアンケートの実施については記載内容は個人が特定できないよう十分配慮し、口頭および論文等で発表する場合があることを口頭で説明の上、実施した。

④ アンケート記載内容

〈ケアカフェに参加してどうでしたか〉

- とても良い時間でした。ゲストのお話（語り）を聞けてよかったです。お話し下さってありがとうございました。勇気に感謝です。（社会福祉協議会　社会福祉士）
- 2回目になりますが、まだまだ底が見えないです。（地域包括支援センター　社会福祉士）
  ゲストのお話は、大変な境遇を優しくまっすぐに話してくださり、一言一言染みました。色々な立場の方とお話ができて、こういう場ってなかなかないなと思います。（児童養護施設　社会福祉士）
- たくさんの人の話をきけて嬉しくて、もっともっとききたくなりました。それから、自分の思いをふだんの生活にかかわりのない人たちだからこそ何も気にせず表出できたことで、ストレス発散になりました！！（看護師）
- いろんな人の考えをきき語り合える場があって嬉しいです。福祉系など社会人の方と対等に話せるのが学生として刺激的（学生）
- 実際に福祉の現場で働いておられる方々の話をたくさん聞くことができて、「多様性を認め合おう！」といったごく楽観的なスローガンだけでは解決できないことがたくさんあることを知りました。（無職）

〈セクシュアリティーというテーマについてはどうでしたか〉

- 普段あまり考えることのないテーマで、当事者の方の話を聞けたのは非常に良い時間になりました。正直、こういった方と接したときにすんなり受け入れるものではないですが、その「受け入れられない」ということを乗り越えようとすることが大切なのではと感じました。（社会福祉協議会　社会福祉士）
- 初めてゲイの方とお会いし、初めてお話をさせてもらいました。違和感をあまり感じませんでした。（地域包括支援センター　社会福祉士）
- 偏見を持たないシンプルに接することの大切さを知りました。（市役所　社会福祉士）
- 自分の周りにセクシャルマイノリティの方は複数いるけど、その方々の歩まれてきた道のりを詳し

く尋ねたことはなかったので、ゲストが幼少期から現在まで語ってくださって、すごく聴き入ってしまいました。良い時間がもてました。（看護師）

・普段の生活では接することのない方からお話を聞くことができる貴重な機会でした。以前から興味のあったテーマで生の声を聞いてたくさんの苦悩を知ることができました。専門職としてどう接していけば良いのか考えさせられました。（学生）

〈セックスワークというテーマについてはどうでしたか〉

・本音と建て前が自分の中で非常に渦巻くテーマでした。ただモヤモヤしていたことが、最後のゲストさんの「セックスワーカーであっても様々な属性を持っている」「偏見があることは悪いことではなくそこからどう歩み寄るかを考える」という言葉に少しモヤモヤが晴れた気がしました。本当にゲストさん、ありがとうございました。（社会福祉協議会　社会福祉士）

・特に周りの人はどう考えているか気になるとともに、最後のセッションは、戸惑ったとき、という自己の倫理観を、きれいごとでなく見つめ直す機会として、とても重要かと思いました。（病院　社会福祉士）

・「セックスワーカー」初めて聞く言葉でした。その方の悩み、現状を知れて勉強になった。（薬局薬剤師）

・性、セックス、SW・・・人間であり有性生殖をする生物である私たち人が持っている欲ーとりわけ性欲というものは切っても切れない話題であるように感じています。（学生）

・特に印象に残っている話は、日常で同業者に出会う機会がほとんどないことです。（他の職業ではほとんどありえない話のような・・・）医者などに否定され、同業者に会えず思いを分かち合えないという状況は、孤立を生み、当事者をより苦しめることになると思いました。（院生）

・う～ん。いろんな意味で考えさせられました。職業として認識してよいか、しかしマイノリティとして生活しづらいのであれば支援は必要、この二つの方向から考え、悩む問題と思います。（社会福祉法人　事務員）

・もやもやして書けないけど話せたことはよかった。もう少し話したかった。（障がい者自立支援施設　社会福祉士）

〈薬物依存症〉というテーマについてはどうでしたか〉

・共感できました。「霊的な所はなんだろう」って考える時間でした。社会にある弱者が自分の多様性を認められる社会になってほしいです。（学生）

・毎回違うテーマなのに、いつも最後の方には似たような本質的な話になり、面白いなあと思います。「薬物依存」の話をもう少しきけたら嬉しかったです。（精神保健福祉士）

・本心をつつみかくさず語っていただいたことに胸がうたれました。いろんなことを考えさせてもらいました。（ケアマネジャー）

・普段遭遇することがまれなケースだったのでとても面白かった。（薬剤師）

・おもしろかったです。スピリチュアルな痛みは難しかったですが、私の中にもあると思います。私の存在価値は何だろうとふと考えました。（学生）

・現代社会がかかえるひとつの課題として考えられるもので、決して他人事ではないテーマだったように思える。（学生）

〈女性　統合失調症というテーマについてはどうでしたか〉

・統合失調症を含め、精神疾患、障がいは誰しもなり得る可能性があり、遠い存在なようで実は身近な存在であると思う。（学生）

・地域にもこうした課題をもつ人たちがいて関わり方の参考になった。（社会福祉協議会　社会福祉士）

・悩みが色んな要素がからんでいてそれをどう聞き出すのか、大切だと思いました。（音楽講師）

・統合失調症って、とても身近なように感じました。「個性」とはくくれない「しんどい部分」を、もっと理解して（ケースは人それぞれですが）よりよい対応ができればと思います。（重症心身障害者施設指導員）

・ご本人のお話と、支援者の方々の話がよかったです。（医師）

・身近にもおられたので、援助者の心構えとして大

変参考になりました。そして自分自身も精神的に弱いところがあるので、ゲストさんの言葉は心に迫りました。良かったです。（高齢者福祉施設施設長）

・知っているけど詳しくは説明できない分野でしたので勉強になりました。（公務員　社会福祉士）

・今まで話したり考えたことのなかったテーマだったので、ちゃんと話についていけるか不安でしたが、たのしかったです。統合失調症でもHIVがからむと、また個性がつよくなり、深い話となりました。（学生）

<仕事にケアカフェ体験を活かせそうですか>

・人としての幅、支援者としての幅が広がりそう。（社会福祉協議会　精神保健福祉士）

・必要感性が磨かれます。（地域包括支援センター　社会福祉士）

・明日から出会う、いつもの子どもたちや同僚に抱いている固定観念をふりかえってみれば、もっと人に優しくなれる気がします。(児童養護施設　社会福祉士)

・「できない」から、そこで終わらずどうしていくか、ということを自分ひとりで考えているといつもすごく重荷に感じてしまうけど、ケアカフェに参加して他の人たちも似たような課題を抱えていることを認識できて、少し気持ちが軽くなりました。（看護師）

・生の体験談がきけるのはすごい勉強になります。きくだけでなく、振り返って共有できるのがさらに勉強になりました。（看護師）

・自分自身と向き合うことができました。相談する側もされる側も人という言葉が心に残っています。（学生）

・PSW、MSWとして10年となったら、当たり前すぎて気づかなくなったこと、初心をふりかえる機会でもありました。ありがとうございました。（病院　精神保健福祉士・社会福祉士）

・自分のこりかたまった価値観をほぐしていけそうです。ありがとうございました。　（病院　社会福祉士）

・今後の事業展開のヒントになったように感じました。　（老人介護職）

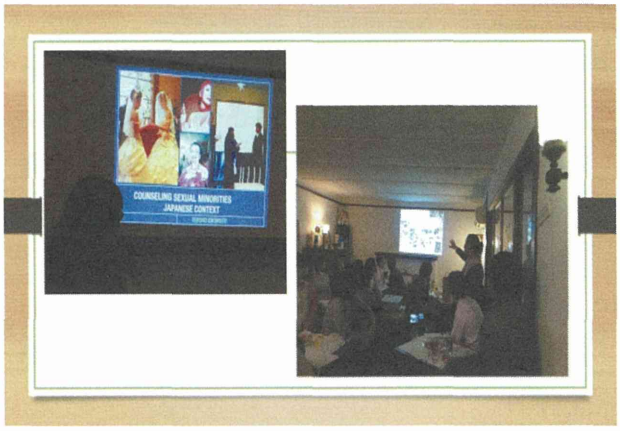
・その悩みを持っている方にどのようにアプローチできるかどのように助けられるかなど考えさせられる時間でした。非常に勉強になりました。（薬剤師）

・役立ちます！！もっと早く参加すればよかったです。（高齢者福祉施設施設長）

※以上は一部抜粋

資料1　ケアカフェばざーる　ちらし

資料2　当日風景（写真）



考察

以上の通り、年度内の研究としては、プログラムの計画、実施、アンケート集計までにとどまった。主にアンケートの記載内容から考察すると、そもそものケアカフェの目指している対話の場が相対可能性を創出し、人との違いに直面し味わうプロセスが容易されていることによって、連携可能性、つまり自分ではない力を仲間に補完してほしいと連携を申し出る動機やきっかけづくりになっていると思われる。特に、バザールカフェにおけるケアカフェでは、当事者の参加を積極的に認めていること、当事者がまずは問題を提起するインスピレーショントークがあることで、日常ではなかなかない、いわゆる当事者との直接的な対話や、それをうけての思索の時間

を多様な立場の人々と共に過ごすという体験を生み出していると思われる。つまり、普段なかなか取り扱われないテーマにより相対可能性を生み出した対話の場が、個と個の連携実現を承認していく場へと移行し、活かされていると思われる。

次年度以降、引き続きケアカフェが実行できれば、引き続き会話分析を行い、プロセスの評価により多様な立場の人々の連帯によるコミュニティ形成の契機を探っていきたい。

研究②（調査）「京都バザールカフェにおける京都ダルク利用者に対する就労支援プログラムの評価（パイロット調査）

研究者　松浦千恵

目的

本研究では、2007年度からバザールカフェと京都ダルクで行ってきた就労支援プログラムを利用した京都ダルク利用者に対し、プログラムを評価してもらい、今後薬物依存症からの回復を望むHIV陽性者に対する地域支援のあり方の一つとしての就労支援の可能性を模索することを目的とする。

方法

2007年よりバザールカフェが就労支援を行った京都ダルク利用者17名より比較的新しい3名を抽出した。インタビューにあたっての趣旨を文面と口頭で説明し同意を得た（資料3）。

その後、バザールカフェにおいて個別に半構造的インタビューを行った。面接回数は1人につき1回、インタビュー時間に要した時間は1回約1時間30分、質問内容は以下の5点である。

1. 京都ダルクにつながるまでの背景
2. バザールカフェにどのようにしてつながったのか
3. バザールカフェでの就労経験はご自身にとってどのようなものであったか
4. バザールカフェでの就労について改善点や要望等
5. 現在のご自身について

インタビュー対象者

	性別	年齢	覚醒剤使用歴	刑務所	クリーン歴	就労期間（バザール）	現在
A	女性	40代	29-36歳	服役1回	2年	6か月	アルバイト
B	男性	30代	29-35歳	服役1回	3年	12か月	アルバイト
C	男性	50代	18-42歳	服役4回	7年	33か月	自助団体スタッフ

*クリーンとは薬物を使っていない期間のことである。ここでいうクリーン歴とは、ダルクにつながってからの使っていない期間のことである。3人ともダルクに繋がる前に刑務所や病院にいた期間があるため、実際にはもっと長く使っていない期間がある。

結果

以下に述べるのは調査者が注目する分析軸である。

① 当事者団体との連携

インタビューでは、ダルクに繋がるきっかけは、刑務所での覚醒剤教育に来たダルクのスタッフ（2名）、あるいは精神科病院のPSW（1名）であった。ダルクに繋がった結果、バザールカフェでの就労支援プログラムに入る事が出来た。以上の点から、地域のリソースが出所後に継続して断薬をしていける場に繋がることの重要性と、他の活動をしている団体が当事者団体と普段から繋がって連携していく事が大切であるとわかった。

バザールカフェは、1999年に活動を開始したが、2002年には既に薬物依存症の人たちが集まれる自助グループミーティング（NA Narcotic Anonymous）に会場を提供し、その後2007年より同志社大学の学生との協働パイロットプロジェクトとして京都ダルクのメンバーと1日カフェを運営した。それ以前2004年より、週に1度営業日に庭のボランティアとして活動にきてもらい、バザールカフェとの関係性を構築した。

地域で活動をしている様々な支援団体が緩いネットワークを築き、お互いの場で協力していく関係性を普段から形成していく事も大切である。

インタビューの中で、「ダルク以外の場での交流」「ダルクだけの生活だったので、外に出る事は楽しかった」「バザールの人間はある程度病気の事とかを理解しているので、何も隠さずに正直に話せるようになっていった。その結果、ダルクでのミーティングでも正直に話せるようになった」「ダルクだけの生活から外に出られるようになって、明るく前向きになった」と述べられている。多様な支援団体が連携し当事者支援を行う事が大切である。

② 他者との関係性の構築の場

薬物依存が進行する中で人間関係を壊してきたことにより、自分自身が他者と関わる自信を失っていたり、コミュニケーションに対する不安を抱えていたり、社会に出る事を不安に感じている事がインタビューの中でわかった。

「ダルクも病院も刑務所の延長だった。しらふで社会（仕事）に出るのは10年ぶり。諦めていた。人と関わるのも上手じゃないと思っていたし、コミュニケーションも大勢とは出来ないし、仕事も職種を考えなあかんと思っていた。でもバザールに来ていろんな人とコミュニケーションもとれたし、やっていけたから私もまだ大丈夫なんやと思った。私でもまだ入っていける場所があるんやと思えた。」「後ろめたいことをしてきた汚い自分と関わってくれる人などいないと思っていた。やくざをやめたら何もない。自己肯定感が低いのでいろんな資格が無いと思っている。例えば結婚とか女性と話す事とか。学生と一緒に働く中で自分がちゃんとコミュニケーションをとれる事によって少しずつ自信を持つ事が出来た。」「必要としてくれていることがわかって、今の自分でいいんや、このままやってていいんやと思えた。」以上のような発言から、受容されている感覚、安心していられる環境、裁かれない環境の中で、他者との関係を少しずつ作っていく事が本人達の自己肯定感に繋がる事がわかった。しかしながら、理解のある場から大きな社会に出たときのギャップを感じ傷ついた経験をした人もいた。「バザールカフェを出て、ある会社のアルバイトをしたが、一般社会とバザールとの違いを目の当たりにした。必要とされていないと思った。必死にやっても足りない。社会の人はその程度では認めてくれなかった。1から10まで言わな分からんのか、仕事が遅いなど実際に言われた。3ヶ月で辞めて、1年間仕事を探しにはいくものの何もせず無職。」

一般社会とのギャップを今後どのように埋める事が可能であるかについても考えていかなければならない。

③ 段階を踏むことの重要性

3人に共通していることは、バザールカフェでの就労の前に庭のボランティアでバザールカフェに来ていたということである。庭のボランティアは京都ダルクに入寮して早い段階からダルクスタッフと共に来ていた。誰が庭のボランティアに来るかどうかについては、毎回ダルクスタッフと利用者が一緒に考え、ダルクスタッフが今のタイミングで必要だと思う利用者と一緒に来る。タイミングとしては、ダルクに繋がったばかりでまだ自由に行動できない利用者であったり、逆に社会での就労を始めているけれども、安心して人と関わりながら作業をする時間が必要（休息的な意味合いもある）な利用者であったりする。ボランティアの中でも時間の経過とともにリーダーのような役割を与え、ただ言われるままに庭作業をすることから、自発的にしたいことを考えるなどの変化を促す仕掛けもある。ボランティアでバザールに来る中で先行く仲間の就労している姿をみたり、バザールのメンバーと少しずつ交流したりする中で「楽しそう、働いてみたい」という気持ちが芽生えたのだと言う。バザールで就労をした利用者のほとんどが庭のボランティアの経験者である。

就労支援を行なう際、最初からたくさんの事を要求するのではなく、小さなステップを踏みながらだんだん沢山の仕事ができるようになる事で、成功体験の積み重ね、強いては自己肯定感につながることが明らかになった。

④ 中間施設としての役割

長い間、刑務所に入所していたり、クスリの無い状態で仕事をする事が困難だった人たちにとって、「仕事ができる」ということは社会性を取り戻し、自己肯定感を回復していく為に重要である事が明らかになった。

刑務所→出所→ダルク→社会という構図で社会復帰を果たしていく事も可能であるが、社会に対する不安や怖れの気持ちを多く抱え、自分自身を信じることができなかったり諦めの気持ちしかない段階で知らないところへ出て行くということは非常にハードルが高いので、まず薬物関係の人達だけでない多様な人達が生きている小さな共同体で、自分自身の不安と向き合い、自信をつけて社会に出ていく準備をする事が大切である。

「ぽんと社会にでるよりいったんバザールに来てよかったかな。自分は次に踏み出すのに足踏みする時間が長い方なので、バザールがなかったら社会に出ることに対して思い切るのにもう少し足踏みをしていたと思う。バザールに来ていたから今の仕事にすぐ行けたと思う。」「安心して働けてお給料が貰える場。少ない額でも給料があることで、ちゃんとしなければならない、貰ったお金の分は何かをしたいなと思えるようになった。仕事に対する欲やプライドを思い出した。お給料を貰うことを思い出した。貰うという事は責任感があること。」「学生と一緒に働く中で、自分がちゃんとコミュニケーションをとれた。その事によって少しは自信を持つ事ができた。学生のやる気、はつらつさ、一生懸命さに励まされた。学生だけではなくて、外国人や病気や障がいを抱えている難しい人たちとも共存していく為に接し方を考えるようになった。人に対しての免疫が出来たように思う。」

多くの人が仕事をしていないということで自分自身をマイナス評価しがちで、自分は社会の中で存在価値がないと感じたり、自分の価値を信じられなかったりする。そして、その状態が長く続くとそれは諦めに繋がり、「自分はもう一生生活保護でいい」というような考えも浮かんだりする。しかし、それは本当の思いではなく、その選択肢しか考えられなくなり、そしてその状況に慣れるしかなくなるのである。仕事というものは社会の中での自分自身の価値を確認できるものであるので、「大きな社会」の中で仕事に向かう気持ちをもう一度創造したり、その気持ちを大きくするお手伝いをしたり、時に支えたりする役割が必要である。

考察

現在のダルク利用者の就労支援はおおむね3ヶ月という期間が設けられている。「楽で安心できて必要とされていることが感じられる場所。本当に好きな場所。でも依存してしまいそうになる。」「居心地もいいし、このままずっとバザールで働けたらいいな。」というように、慣れてくると良い意味でも悪い意味でも「楽な場所」になってくる。期間が長くなると一般就労に対するモチベーションが下がってしまったり、慣れた環境から新しい環境に出ることに躊躇するようなことも起こってくる。そのため一定期間を設けてまず区切りをつけるということは重要である。その間で何を目標にするのかを考えていく必要がある。

バザールでの就労の目的は上手に皿洗いをできるようになることや野菜をきること、料理を盛りつけることではない。その作業を通して他のメンバーと人間関係を作っていくということである。コミュニケーションをとる中で「私は必要な人間なのだ」ということを感じられ、肯定的に自分のことを捉えられるようになっていくことにより、未来に対して諦めていたところから、先の希望を見出して「大きな社会」に出ていく力となることが明らかになった。しかし、就労支援の重要な点は、そのニーズがあるタイミングで対象者を選ぶことである。対象者は、ダルクスタッフ全員で会議し、本人の承諾を得て決定される。ダルクスタッフはその対象者の課題は把握しているが、これまではバザール側はあまり把握してこなかった。今後は互いにその課題などをシェアして、就労支援の中で何を目標にしていくかを話し合うと同時に、本人の変化などをお互いの組織がシェアしていく必要性があることがインタビューを通して分かった。

また本人にとっては、一般社会に出る前段階の「居場所」であり「緩さ」などが必要であるが、今後、バザールでの仕事には、より細かな段階を作っていくことで、出来る事が増える体験を提供し、「大きな社会」で働く事の準備をして行く事も大切である。すでに内外で当事者が行なっている就労支援の方法から学び、プログラムを整備することが次の課題である。

インタビューの中でも明らかになったが、薬物依存症の仲間、支援者以外の社会で自分たちが受け入れられる経験が特に回復を望む人たちにとって大切である。その為にも、地域で様々な活動をしている団体が薬物依存症・HIV・セクシュアリティーなどに対して理解を深め、当事者と出会い「慣れる」機会が大切である。当事者支援のプログラムと地域への啓発活動は同時に行なわれる必要性がある事が分かった。

研究③　支援　「薬物依存から回復を望むHIV陽性者からのメッセージ DVD の作成と配布」

研究者　榎本てる子

目的

HIV 診療に関わる医療従事者が薬物依存からの回復を望むHIV陽性者に対するアプローチを当事者からのメッセージを聴く事を通して理解を含め、関わっていけるようになる事を目指す。また、薬物依存で悩んでいる HIV 陽性者が医療従事者を通して DVD を見る事で、回復に大切な事を知ると同時に「一人ではない」ことを知り必要な社会資源につながれる機会となる事を目指す。

方法

2014年度、研究者の特別研究期間中NPO法人を会場として使用し、病院のカウンセラー及びNPO法人から紹介された薬物依存症からの回復を求めている様々なセクシュアリティのHIV陽性者とそのパートナー（1 名）が週に一度集まり、回復にとって何が必要であるかについてマインドマップを用い話し合いを行なった。

（倫理面への配慮）

関西学院大学臨床・調査・実験研究倫理委員会の承認を受けた。参加者に研究内容を説明し、同意書を交わし参加してもらった（資料4）。

参加者は　5 名　Sexuality 異性愛者　2 名　同性愛者　2名　異性愛者のパートナー1名（女性）

またDVD作成に際しては、文面で趣旨を説明し、同意を得た人に協力してもらった（資料5）。

同性愛者・HIV陽性者　5名
女性・HIV陽性者　1名
トランスジェンダー・HIV陽性者　1名
異性愛者・外国人・HIV陽性者　1名
女性・HIV陽性者のパートナー　1名
合計　9名からのメッセージ

「回復に必要なこと」を仲間に啓発する為メッセージ性のあるDVDを作成。AIDS拠点病院カウンセラー、ソーシャルワーカー等にDVDを配布し、薬物依存症からの回復を願っているHIV陽性者に対する理解を求める啓発を行い、また必要な仲間にメッセージを届けてもらうことを依頼する。

結果

以下のワークショップにおいて、医療従事者（特に臨床心理士・看護師）にDVDを配布

配布先

① 「物質依存・HIV陽性・セクシュアル・マイノリティを併せ持つ当事者の思いを聴くグループミーティングの参与観察とディスカッション」
日時：2014年12月5日（金曜日）
参加者：30名

② 「HIV 感染症とアディクションを併せ持つ方への心理的な援助についての研修会
～日々の心理実践のなかで対応していくために～」
主催：厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業 HIV 感染症及びその合併症の課題を克服する研究 HIV 陽性者の心理学的問題と対応に関する研究
後援：日本臨床心理士会
日時：2015 年2 月1 日（日）
参加者：25名（講師等含む）

考察

DVD を通して心理的ケアの提供者に対し、回復に必要なことについての理解を深める機会を提供出来た。

薬物依存、セックス依存、様々な依存症の背景には、本人も長い間封印してきた痛みがあり、その痛みに対する処方箋として化学物質を使用してきた人が、その摂取をやめるという事は痛みだけが残る。それゆえ、援助職に従事する者は、その痛みに対し

て化学物質を用いず軽減させていく違う方法を一緒に探していく事が大切である。

DVD の中では、援助職の人に望む事として以下の点を挙げている。

① 自分の話を聴いてくれる人
② 原因を探っていく過程を一緒に話しながら自分から見いだせるように寄り添ってくれる人
③ 継続して自分が変化した時に聴いてくれる人、長期戦、再使用もある事を認識してその変化の環境も一緒に考えてくれる人
④ 代わりになるものの選択を一緒に考えてくれる人
⑤ やめている自分を一緒に誇らしく思ってくれる人
⑥ 再使用したときも、自分がやめていた時期がある事を思い出させてくれる人

上記の点は、一人一人の行動の背景に関心を持ち、その人が痛みの緩和の為に使っているとしたらその痛みについて話す中で原因を一緒に探り、その原因からの解放を願い、どんな形でも継続して関わり続けることの大切さを教えてくれている。DVD の配布を通して、薬物依存症からの回復を望むHIV陽性者に対する心理的アプローチについて理解を深める機会となったことを期待したい。今後、臨床心理士を中心とした医療従事者に対し、DVD 鑑賞後のアンケート調査などを行いDVDの内容の評価を実施する。

DVD の利用方法については、医療機関を通じて、回復を望むHIV陽性者にもメッセージを運べる事が、DVD 作成に協力してくださった当事者のエンパワメントになることも配布時に伝え、より有効に利用できるような工夫が必要である。孤立化する可能性が高い当事者に対して、仲間のメッセージを伝える事によって、必要な社会資源に繋がるきっかけとなることを期待したい。

結論

近年、HIV陽性者に関わる医療、NPOの間で課題となっている薬物依存症を抱えるHIV陽性者に対し、地域包括型HIV陽性者と薬物使用からの回復モデルを開発し、実践する試みを行った。

ケアカフェの開催は、今までHIVについて学ぶ機会が無かった地域の精神保健福祉に従事するソーシャルワーカー（社会福祉士、精神保健福祉士）、福祉を専攻する学生、地域NPO従事者、宗教者にとって、自分自身の価値観を見つめる機会となるとともに、HIV 陽性者の抱える苦悩に初めて接する機会となった。地域での生活が生活の大半を占めるHIV陽性者の人たちにとって、地域で安心して悩みを話せたり、情報を得たりできる場は重要である。ケアカフェの開催は、全く知らない人たちが出会い、話し合い、顔と顔とで繋がる。ケアカフェを継続開催する事で、病院だけではなく、地域の様々な資源がつながり、連携し、より多くの場でHIV陽性者の方々が相談出来る場を創造していける可能性があることが明らかになった。

次年度の課題としては、地域の様々な機関で働く人達がHIV陽性者の抱える課題や悩みを理解し、地域で支援していく体制を構築する阻害要因となっている要因を分析し、阻害要因を軽減していくために必要なテーマ設定でケアカフェを継続して行く必要がある。また、薬物依存症からの回復の道を歩んでいる人達にとっての就労支援のあり方について内外の実践例を参考にモデルを構築していくのも課題である。支援体制としては、HIV 陽性者・薬物依存という課題を抱えた人達が集まりピアサポートミーティングを開催できる場づくりも性急の課題である。またDVDをより多くのAIDS拠点病院の医療従事者に配布し、当事者からのメッセージを聴く事により、当事者理解を深め、回復に必要な地域資源と連携して支援体勢を構築していく事も課題である。医療機関と地域資源が連携し、困難な課題を抱えているHIV 陽性者の日常を支援していくことを目指したい。

健康危険情報

該当なし

知的財産権の出願・取得状況

該当なし

研究発表

1. 原著論文による発表
   次年度執筆予定

2.　口頭発表

次年度学会発表予定

文献

i　厚生労働省　エイズ動向委員会「平成26年エイズ発生動向」
http://api-net.jfap.or.jp/status/2014/1411/20141121_hyo_02.pdf　オンライン　2015/01/03

ii　HIV感染者・AIDS患者　統計　平成25年　神奈川県
http://www.pref.kanagawa.jp/uploaded/attachment/733839.pdf　オンライン　2015/01/03

iii　山本善彦、織田幸子、仲倉高広、栗原 健、岡本学、安尾利彦、吉野宗宏、矢倉裕輝、龍 香織、治川知子、下司有加、谷口 智宏、矢嶋敬史郎、笹 川淳、富成伸次郎、渡辺 大、牧江俊雄、上平朝子、白阪琢磨: HIV 感染者における薬物使用の実態調査. 日本エイズ学会誌9(4), OS21-153, 2007 3)

iv　織田幸子、山本善彦、仲倉高広、安尾利彦、岡本 学、龍 香織、治川知子、安尾有加、矢倉裕輝、吉野宗宏、栗原 健、牧江俊雄、上平朝子、白阪 琢磨:2007　HIV 感染者の薬物使用の問題:実態調査を踏まえて. 日本エイズ学会誌9(4), OS21-154,

iv　Kuwahara T, Nakakura T, Oda S, Mori M, Uehira T, Okamoto G, Yoshino M, Sasakawa A, Yajima K, Umemoto A, Takada K, Makie T, Yamamoto Y 2008: Problems in three Japanese drug users with Human Immunodeficiency Virus infection. J Med Invest, 55:P156-60

vi　小島賢一 :薬物乱用問題の概観. 日本エイズ学会 13(1), P8-12, 2011

vii　堀籠淳之・阿部泰之：医療者・介護者・福祉者のためのケア・カフェ.Palliative Care Research2014；9 (1) 901-905

viii　阿部泰之：医療者・介護者・福祉者のための「ケア・カフェ R」の全国開催支援および、医療介護福祉従事者間の連携尺度を用いた「ケア・カフェ R」の実効性の調査研究.Journal of Sugiura Foundation for Development of Community Care Vol.3, 2014 p46-49

資料3　インタビュー調査に協力してくださる方への説明書

研究課題

「京都バザールカフェにおける京都ダルク利用者に対する就労支援プログラムの評価（パイロット調査）」

挨拶とこの研究への協力方法について

本研究では、2007年度からバザールカフェと京都ダルクで行ってきた就労支援プログラムを利用した京都ダルク利用者様に対し、プログラムを評価してもらい、今後薬物依存症からの回復を望むHIV陽性者に対する地域支援のあり方の一つとしての就労支援の可能性を模索していきたいと考えております。つきましては個別においてインタビューをさせていただきたいと思います。みなさまの貴重な体験談を聞かせていただき、その経験を活かし、将来他の同じように薬物依存からの回復を願っている人たちに寄り添っていくことを願っているみなさまに是非ともこの研究に参加していただきたいと願っております。

研究方法として以下の項目で半構造的インタビューを行いたいと思います。

1．京都ダルクにつながるまでの背景
2．バザールカフェにつながるまでの経過
3．バザールカフェでの就労経験がご自身にとってどのようなものであったか
4．バザールカフェでの就労についての改善点や要望等
5．ご自身の現状について

なお、この研究は安東医院　精神科ソーシャルワーカー（PSW）・バザールカフェスタッフ　松浦千恵の研究として責任をもって行います。

(1)プライバシーの保護

今回協力いただく研究の結果は、2014年度厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業「HIV感染症及びその合併症の課題を克服する研究」で報告させていただきます。プライバシーには十分に配慮することをお約束いたします。

説明と同意について

研究責任者から説明を受け、研究にご協力をいただけます場合は、別紙の同意書（2通）に署名をしていただきます。同意書は、あなたと研究責任者が1通ずつ保管することになります。あなたがもし同意されなくても、一切の不利益は生じません。また、同意した後でも、報告書等の発表前に記述した内容をご確認いただき、その際に同意を撤回していただくことも可能です。

(2)ご質問、お問い合わせ

この研究についてご質問などございましたら、いつでも研究責任者にお問い合わせください。

（松浦千恵　TEL　090-7119－7241　Email akash2058@hotmail.com）

研究責任者　安東医院　精神科ソーシャルワーカー・バザールカフェスタッフ　松浦千恵

同意書

私は、「京都バザールカフェにおける京都ダルク利用者に対する就労支援プログラムの評価」のために行われるインタビュー調査への協力に関して、同研究およびインタビュー調査に関する説明を別紙説明書により研究責任者から受け、下記の点を確認したうえで、参加することに同意します。

1. 研究の目的
2. インタビュー調査の方法・内容
3. 本研究への協力について、同意をしなくても不利益をこうむらないこと
4. プライバシーが最大限に尊重されること

研究協力者氏名

同意日　　2015年　　月　　日

本研究の説明をした研究責任者

所属　安東医院PSW/バザールカフェ・スタッフ

氏名　松浦千恵

ご本人の希望により、インタビュー調査の結果を公表する前に、研究責任者が再度連絡をとり、ご本人が登場する箇所の記述について確認したいという場合は、こちらに氏名・連絡先をお書きください。

氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

連絡先＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

本同意書は、本人と研究責任者である松浦千恵（安東医院/バザールカフェ）が一部ずつ保管する。

資料4　グループミーティングに協力してくださる方への説明書

研究課題
地域におけるHIV陽性者の薬物依存回復支援モデル開発-霊的ケアの視点から-
挨拶とこの研究への協力方法について

日本では、HIV感染経路のうち静注薬物によるものは男女をあわせても約0.3%と極めて少数です。しかしながら、HIV医療の現場において近年HIV陽性者の中で非合法薬物の使用により逮捕される人や、薬物使用からの回復を願う人達が増えてきております。薬物依存を抱える人達が集まる薬物関係の回復施設などと連携しながらこの課題に取り組んできた中で、社会的回復と同時に霊的回復を望む人達に出会ってきました。

HIV治療は医学の発展で長期に付き合っていく病気となってきています。その為、多くの患者さんは、年に4回の受診となり、ほとんどの時間を地域で生活しています。地域生活者として、HIVという病気を抱え、またSexualityの課題、就労の課題、薬物依存からの回復の課題を抱えた人達にとってどのような「場」を社会の中でつくっていくことが求められているのか、当事者の方々の意見を中心に考えていきたいと願っています。

この研究を通して、AIDS拠点病院と連携しながら、薬物依存からの回復を願う人達、また刑務所から出所してきたHIV陽性者の人達が社会で再度生きていく為の足がかりとなる仕掛けを作っていきたいと思います。

現在、社会には薬物依存からの回復を願う人達には、病院でのプログラム、自助グループでのプログラム（ダルク、NAなど）があります。今回は、その中でも特に、宗教的課題と向き合いながら薬物依存からの回復に少しでも取り組んでいきたいと願っている皆様と一緒に研究をする事により、宗教界がミーティングの場所を提供するのみではなく、宗教者の関わり方について皆様から学ばせていただき、宗教界が新しい試みが出来る方法を模索したいと願っております。

この研究の目的は、HIV陽性者の薬物依存からの回復支援において、霊的回復がどのような意味をもつのかをグループミーティングを通して明らかにすることです。皆様は、既に病院での個々人のカウンセリングにおいて、別々に薬物依存からの回復過程に宗教的テーマが重要である事を話してこられました。今回は、同じような課題を持った人たちが集まり、それぞれが個々に取り組んで来た宗教的テーマや霊的回復について話し合っていきたいと思います。

一人一人の貴重な経験を活かし、将来、他の同じように薬物依存からの回復を願っている人達に寄り添っていくことを願っている皆様に是非ともこの研究に参加して頂きたいと願っております。

この研究は、関西学院大学　神学部　榎本てる子の研究として責任を持って行ないます。

グループミーティングへの参加について
みなさんに参加していただくグループミーティングでは、みなさんが個々人のカウンセリングのセッションで話してこられた薬物依存からの回復過程において感じられた宗教的テーマに焦点を合わせ話し合いをしたいと思っています。

このグループミーティングは、毎週1回、2時間程度皆さんから出された薬物依存からの回復に必要な宗教的テーマについて話し合う会を実施します。グループミーティングでは、主に研究責任者の榎本が話し合いをリードし、必要に応じて臨床心理士　仲倉高広（大阪医療センター所属）およびソーシャルワーカー青木理恵子（CHARM事務局長）が参加します。

毎回のグループミーティングで話された内容は、報告書という形で翌週、榎本が参加者に提出し、参加者がその内容を確認した上で、パスワード付きの外部記憶装置に厳重に保管します。報告書には、個人を特定するような名前や機関などの記載はしません。

関西学院大学神学部および人間福祉学部の学生がNPO法人CHARMに実習生として参加する場合は、以下のような条件の下で行ないます。①実習生は、グループミーティングに同席し、宗教的テーマや霊的回復がどのように話し合われるのか、またその話し合いによって、グループの中にどのような変化が起こるのかを観察することを目的とするものであること。したがって、グループの中で個人的に意見を述べることや、話し合いの内容を批判することがないこと。②グループミーティングの参加者の皆さんの全員の同意が得られること。③先の２つの条件が満たされた上で、実習生が参加にあたって個人情報保護に関する誓約書に署名すること。

グループミーティングの話し合いは、皆様のプライバシーを保護するため、録音、録画はいたしません。皆様の合意を得た報告書のみを作成しますので、毎回の報告書の内容確認をお願いしたいと思います。

グループミーティングの途中で参加を中止したい人は、いつでも中止することが出来ます。また、話し合いの中で、心理的な負担や不安が大きくなった場合、皆さんの心のケアをする為に、CHARMと連携するエイズカウンセラーが待機しておりますので、CHARM事務局長　青木理恵子に相談をして下さい。また、個々人で既にカウンセリングを受けている人は、希望に応じて個々人専属のカウンセラーともこの件について相談できますように、あらかじめこちらの方から、皆様の同意を得た上で病院のカウンセラーに連絡をさせていただきます。

プライバシーの保護

今回協力いただく研究の結果は、2013年度関西学院大学特別研究期間報告書、エイズ学会、人権に関連のある授業、講演などで発表する予定ですが、あなたやあなたの話に登場する個人のプライバシーには十分に配慮することをお約束いたします。

説明と同意について

研究責任者から説明を受け、研究にご協力をいただけます場合は、別紙の同意書（2通）に署名していただきます。同意書は、あなたと研究責任者が1通ずつ保管することになります。あなたが同意されなくても、一切の不利益は生じません。また、同意した後でも、報告書等の発表前に記述した内容をご確認いただき、その際に同意を撤回していただくことも可能です。

(1)　ご質問、お問い合わせ

この研究についてご質問などございましたら、いつでも研究責任者にお問い合わせください。(榎本　てる子　TEL　090-8652-9097　E-mail tenomoto@kwansei.ac.jp)

研究責任者　　関西学院大学　神学部　准教授　榎本　てる子

同　意　書

私は、「地域におけるHIV陽性者の薬物依存回復支援モデル開発-霊的ケアの視点から-」の一環として行われるグループミーティングへの協力に関して、同研究およびグループミーティングに関する説明を別紙説明書により研究責任者から受け、下記の点を確認したうえで、参加することに同意します。

1．研究の目的
2．グループミーティングの方法・内容
3．本研究への協力について、同意をしなくても不利益をこうむらないこと
4．プライバシーが最大限に尊重されること

研究協力者氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

同意日　　2015年　　月　　日

本研究の説明をした研究責任者
所属　関西学院大学　神学部　准教授
氏名　榎本てる子

ご本人の希望により、グループワークの結果を公表する前に、研究責任者が再度連絡をとり、ご本人が登場する箇所の記述について確認したいという場合は、こちらに氏名・連絡先をお書きください。

氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

連絡先＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

本同意書は、本人と研究責任者である榎本てる子（関西学院大学）が一部ずつ保管する。